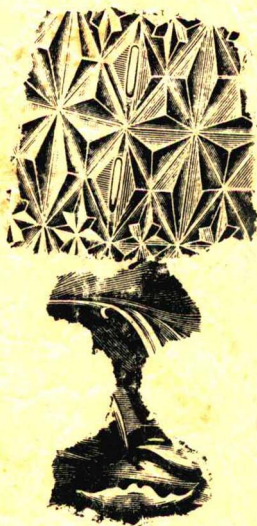


人間の運命 7

夜明け 再会

芹澤光治良



人間の運命 7

夜明け 再会

芹澤光治良

新潮社版

人間の運命 7

夜明け・再会

〈芹澤光治良作品集16〉

昭和50年5月10日

印刷

定価 850 円

昭和50年5月15日

発行



著 者

芹 澤 光 治 良

発行者

佐 藤 亮 一

発行所 株式 会社 新潮社

東京都新宿区矢来町71

電話 業務部 (03) 266-5111

編集部 (03) 266-5411

郵便番号162 振替東京4-808

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

新宿加藤製本株式会社

© Kojiro Serizawa 1975 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

夜明け
再会

装
画
司
修

芹澤光治良作品集

第16卷

夜
明
け
へ人間の運命へ第十三卷

第一章

次郎が書齋で宮沢明子と話していると、軽打もなしに、ひょっくり一郎がはいって来た。一郎のよくやる無遠慮な態度だ。次郎は顔もしかめないが、若い明子は慌てて長椅子の隅に体を縮めた。その横に一郎は腰をおろしながら、「石田の弟の婚約者だつて、節子さんが言うので、失敬しました」

と、明子の方をぶしつけに見た。

「近所に住む兄です。兄は孝一君と親しいから……明子さんは孝四郎君の婚約者だけれど……孝四郎君がジャワにいて、東京の空襲が心配だから、石田君の家へ疎開するように、しきりに言つて来るのでね」

次郎は正直に一郎に話した。一郎からも孝一に明子のこととをとりなしてもらおうと、考えたからだ。

「A新聞の記者でしたね。特派員でいまジャワですか」

「ええ、特派員も兵隊同様に、戦争が終らなければ、帰れないのでしょうか」

一郎がA新聞の記者をしたことを、明子も知っていた。

孝四郎から噂をきいたことがある。新聞社の特派員は兵隊

ではないから、転勤のようにして本社に帰ることはないか、この大先輩にきいてみたかった。

「むずかしいですね。でも、兵隊より危険がないから、安心して、疎開して待つていればいいですよ。石田の家は広いし、あそこなら空襲でも安全だし、第一、食糧が豊富だから……東京にまごまごしていることはないですね」

「明子さんは東京にいた方がいいらしいが、孝四郎君がほくに幾度も、明子さんを疎開させて欲しいと言つて来るので……ようやく明子さんを説得したところです、ね？ 万一東京に空襲があつて、明子さんに怪我でもされたら、ぼくは責任があるから——」

「責任だなんて、先生……だけれど、あたくし、ただ、あの人の家の皆さんには、あの人から引きあわせてもらえる日を、待ちたかったですから……」

「まだ石田にも会つていないのですか」

「孝四郎君はてれやで、出発前に、紹介しなかったもので……家の方へは、前線から幾度も手紙を出しているから、ご存じのようだが、孝一君はどうかな。明子さんが疎開する決心をしたらば、ぼくから話すつもりだったけれど……明子さんにしてみれば、疎開といつても、孝四郎君の家の人になることで、気が重かつたようだが、孝四郎君の切ないだから、やっとその決心をしてくれて……ぼくも安心

したところです。明子さん、できるだけ早く支度して下さいよ」

「はい……支度って、一週間もあれば、その間に、婆やも来ましようから……では、あとのことは先生のお指図をお待ちします」

そう言つて、明子は立ち上った。次郎は玄関へ降りて行ったが、一郎も節子も玄関に見送つた。明子はモンペ姿の上に、洋服の茶色のオーバーを着て、靴をはきおわると、次郎の顔を見上げるようにして、言つた。

「先生、あたくし、彼の故郷へ行つたら、空を仰いだり、波の音をきいたりして、自然描写の勉強します。いままで、あたくしの書くものには自然が欠如していましたから、自然を観察するだけでも、彼の故郷へ疎開することを喜ばなければなりませんわ」

ハンドバッグの代りに、無様な手製の防空頭巾をさげて、明子は出て行った。あとですぐ——孝四郎君の婚約者は女流作家の卵かと、一郎が言うのを、節子がおさえるようにした。

「お兄さん、明子さんのことどころではないでしょう？」

あの、親さんがすぐ来ると言っていたんでしょ？」

「そうだ。親さんが来るからって、電話があつてね。そろそろ着く頃だ——」

「親さんで……ぼくは、別にお招きしてはいないよ」

「親さんから進んで来ると言うのだから、何かお話があるのだろう」

次郎は呆れた。一郎は天理教の二代目の教祖だとか、神さんだとか言つて、崇敬しているが、次郎は興味も関心もない。避けたいくらいだ。節子や末弟の病気を助けられたということだけで、家庭のなかに、前時代的な非合理がしのびこむのは、たえられないのだ。この老婆は毎年七五三の頃に、上京するならわしであるが、今年も食糧難と交通難をおして東京へ出て来たと、二週間ばかり前に一郎が目を輝かして話したことがある。次郎はとりあわなかったが、その後、噂がなかったから、もう播州へ帰つたものとはかり思つていた。

「また誰かと会いたいから、ここへ来るといふのですか」

「ぼくは知らんよ。どうして——」

「この前ここへ来たのは、白鳥大使に会うためで、あなたが連れて来ましたね。あの時は、アメリカと戦争してはいかんと言うことだったからさ……今度は敗戦の色がこいから、早く矛をおさめるように、天皇に働きかけると、また白鳥大使に話すのならば、面白いだろうが……」

「知らん……白鳥は意気地がないからなあ。この前の時、アメリカとは決して戦争しないと、はっきり親さんと約束

しておきながら、かんじんな時に、そう陛下に奏上もできなかったし、軍を説得もしなかったからな。それも、ただ右翼がこわいばかりだったから……それでいて、親さんから息の根をとめると言われたことを思い出して、おそれをなして……とうとう気がふれて、入院したりさ……」

そんな議論よりも、節子は接待のことで、おろおろしていた。

「今からお出でになるとすると……お夕食の用意をしなればならないでしょう？ 困ったわ、おご馳走できないもの……お米は闇でわけてもらったばかりですから、いいですけれど……お魚やお野菜は、今からでは、とても、手にはいりませんし、お茶菓子だって、家にはありませんよ」

「そんなこと、気にするな。非常時だもの……ご馳走にお招きしたのではないのだから——」

「そう仰有^{おつ}っても、おもてなしができなくては、わたしの恥ですわ……どこへお通しするの、二階は幾日もお掃除してないし……」

「離れだって、茶の間だって、どこでもいいさ……騒ぎたてるものではない」

「だって、今では人手はなし……お客はできませんからね」

「若ちゃんがいてくれるのだから、ありがたく思わなければ……」

ば……」

「あなたは思いやりがないんです、わたしには——」

そう言い放つなり、節子は階段をかけ上り、二階の雨戸をがらがら音をたてて開けはじめた。一カ月ばかり前に有田氏が滞在してから、開けたことのない二階だ。次郎には、なぜ節子が荒立っているのか解らない。怒りたいのはこちらで、節子は喜ばなければならぬ筈だ。何かといえば、おやさん、おやさんと、祈りのように唱えて、心だよりにするばかりでなく、子供の学校のことから、日常茶飯事、浴場になめくじの出ることまで、手紙で老婆に相談し、指図を仰いでいる。それが、また次郎には気に入らないのだから、相愛らずに内証で生活指導をうけているのだから、わが家に老婆を迎えて、有頂天にならないのは、どうしたところか。次郎は階下の広縁に立って、ぼんやり空を見ていた。いつ敵機が来るか、戸山ガ原の上にひろがった空である。

「奥さん、森さんの奥さん、うかがいましたよ」

そう、玄関で老婆の声がした。外で一郎が待っていて迎え入れた。この前のように、中年の男女二人の付人がお伴していた。老婆は肥った体をやっと門の階段の上に運んだのか、

「奥さん、二階へ上るのは、しんどいから、下のお部屋にして下さらんかね」

と、両手を膝の上に置き、中腰で節子に微笑みかけた。節子は離れと呼んでいる八畳に案内した。

「ここは景色がええなあ。庭も見えて……それから、奥さん、なんにもせんと……。ご馳走、ぎょうさん持つて参りましたから……牛込の信者さんがちらし鮎や鯛をお重につめて下さりました。なあ、お重はあちらの食堂の方へやって、あとでお嬢ちゃん達とみんなで、ご馳走になりましょうな」

と、おともの婦人に、持参した三段重ねの重箱を二組、台所の方へはこばせてから、笑いながら加えた。

「牛込の信者さんには米屋や魚屋がおつて、さあ親さんが来たからと言って……そんなご馳走してくれたからとて、たくさんの信者さんの前では、喉に通りません。だから、森さんの家へもらつて来て、こつそり奥さんにもご馳走し、わたしらもよばれようと思つてな……東京では正直者の口には、白いご飯はいらんと、聞きましたか……。次郎さんが正直者やから、奥さんも苦労なさるやろう」

はいつて来た時から、節子の心を見透したような言葉だ。節子はわれにもなく恥ずかしくて、あわてた。

次郎が離れに行った時には、老婆は床の間を背に、ゆったり坐つて一郎と話していた。

「——すぐ東京に空襲があるかつて、問われたからとて、

ほんとうのことが言えますか……それを、東京の人はみなきくので、困っているのだつせ。東京へアメリカの飛行機が来たことがありましたな。あれは、二年前の春でしたやろう……二年前でさえ飛んで来たものの、空襲はあるにきまつているなあ。それくらいのこと、神さんでなくても、わかることやろう。それを、わたしがそう答えたら、空襲があると親さんが言つたからつて、騒ぎたてて、みんな落着けなくなるやろう。だから、安心しなはれと、いつも言わなければならんやで……。なあ、東京ばかりか、日本中の町がどこもかしこも空襲で焼かれるかも知れん。日本人の心がたかぶつて、すなおでないからと、神さんは嘆いていなさるで……。安心しなはれと言うと、それなら、荷物を疎開しなくてもいいですかと、すぐみな聞きたがるけれど、なあ。身一つ助かつたら、あとの物は授かるから、心配いらん。ただ、人間みな助けあわなければならんというように、すなおな心でおれば、空襲があろうが、家が焼けようが、神さんはきつと助けて下さると、言うやで。だから、今度東京へ出て来て、信者に心をすなおになつてもらおうと、わたしは苦労したのやで……。でもなあ、東京は天子さんのおられるところやから、人の心もよからうと思つていたが、たいへんやなあ。みんなおいもで腹をすかして、買つて食べるものもないと言うのに、えらい人や軍人さん

には、なんでも手にはいらんものはないのやからな。もうわやや」

「もう戦争もおしまいにしないといけませんね。神さんがいるから、日本は負けないと、親さんは言ってられたそうですが、それも民心を動揺させないためですか」

と、一郎が言葉をはさんだ。

「日本が勝つとも、負けるとも、わたしは言わんで。イタリアは降参した、今にドイツも降参するやろうなあ。世界中が戦争したのやもの、どこの国が勝つたの、負けたのってことは、ありません。負けるが勝ちということも、あるさかい、日本も降参したらええのや……なあ、弟はん、今日はあんたに話があつて、来たのやで——」

次郎は興味があつたわけではなく、節子が台所へはいつたので、ただ礼儀として、離れの隅に坐つていたにすぎない。それ故、突然そう呼びかけられて、火鉢のそばへよつた。

「天理教を研究しなりましたか」

「いいえ。父が一生をささげた信仰ですから、それが無駄であつたか、一度は真面目に研究してみたいとは思つていますが……」

「お父さんは立派なお方やなあ。信仰に生きられて、決して無駄な一生ではありません。天理教は立派な教えやさか

い、研究して下されや。そしたら、今の天理教のあやまちもわかつて、それで、天理教のたくさんの方々が助かることになるやろうからな……キリスト教は研究しなりましたか」

「研究、というほどはしていません」

「天理教といつしよに研究してみなはれや。キリスト教は一番立派な教えやなあ。キリスト教の教えがどんなものか、知りませんが、そう神さんが仰有るで。だから、キリスト教は一番立派な教えに相違ないなあ」

「神さんが仰有るって——」

「神さんはあるのやで……目に見えない、手でもさわられないから、ないときめてはあかん、たしかに神さんはあるのやで。そのことを、あんたに話したくて、来たのだった。次郎さん、お兄さんはわたしのことを、なんと言つていなさるね」

「天理教の教祖のように、親さんだとか、最近では神さんだと言つてようですが……ねえ」

と、一郎の同意を求めた。一郎はうなづいた。

「森さんはそんなこと言いなさるか。天理教の教祖ではありません。二代目教祖だなどと、言う者もあるけれど……信者は不憫やが、天理教など、どうなつてもいいのやで……わたしが神さんなら、次郎さんも神さんや、一郎さ

んも、人間みな神さんや……そう誰にも説いているのやで

……わたしは自分で自分がわからんが、この世に神さんがあることを、知らせに來たのかなあと、近頃、時々思うのやけれど……東京に來ても、播州におつても、いろんな人が、そら病氣だから、そら家がおさまらないから、助けてくれと言つて、ぎょうさん來なさつて、なあ。どうにもならんのだつせ。病氣の人はたださすつてやり、事情のある人には、出まかせにお話をするのやけれど、病氣がなおつたの、お金が儲かるようになったの、うちうちがおさまるようになったの、と言つて、親さんありがたいと、言いなされるけれど……神さんがありがたいとは、ほんとうにわかつてくれないのだつせ。この天も地も動かしている神さんがあるつてことも、わかつてくれないのだつせ。病氣が助かればいい、金が儲かればいい、ただそれだけで、親さんはありがたいと、言うけれど、わたしがありがたいのとは違ふのだつせ。ありがたいのは神さんや。わたしは神さんのお心を、ちよつぱり取次ぐだけやからなあ。病氣がなおつたり、金が儲かつたりすることは、なんでもないことや。神さんのお心に添いさえすれば、自然にそうなるのやが、誰も本氣に神さんのお心を聴こうとしないのやからね」

「神さん、神さんと仰有るが、その神さんというのは、一体なんですか」

次郎は眞面目にきいた。

「なあ、どう話したらいいやろう。形もないから、お見せできないけれど……この天と地との間にいっぱい充ちて、かすかに動いている力みたいなもの、と言つたらいいか、水、火、風と言つたらいいか、夕方沈んだ太陽が、あすの朝、きまつた時刻に、きちんと昇つて来るようなきまり、と言つたらいいか、目に見えないけれど、その神さんが天も地も人間もつくつたのだつせ」

「それは自然ということですね。自然の力、自然の法則が、神さんということですか。すると、神さんのお心というのは、おかしいですね。神さんがどう言っていると、いうのも、おかしいですね」

「なあ弟はん、だから、キリスト教や天理教をいつか研究してみなはれと、頼むのやで……弟はんだから話すのやけれど、天界というところがあつてね、こんなこと言つたら氣違いだと聞えらるから、誰にも言わんけれど、わたしは幾度も天界を見せてもらいました……なあ、神さんは人間みないな形はしておらんが、たしかにお心があるのやで。お心があるから、わたしもそれを聴かせてもらつてゐるのやで。わたしは無學で何も知らんけど、キリスト教には立派に神さんの言葉を書きつけた本があるそうやなあ。天地は變ることがあつても、それに書いた神さんの言葉に

は變ることがないと、ちゃんと保証してあるそうやなあ。そう、わたしは神さんから聞かせてもらったのやで。それだもの、神さんがないの、神さんに心が無いの、というのは、おかしいことだす」

「その神さんの心って、なんですか、一口に言つて——」

「男松、女松の区別はないと仰有るで。高山に育つ人も谷底にうめく人も、人間は一つやと仰有るで。男も女も、金持も貧乏人も、神さんの目には同じ子供やと仰有るで。だから、わが家にあつても、夫も妻も子もみな、たがいに相手を神だとしてたてあい、ゆるしあい、おがんでとおれば、一家はおさまり、病氣や事情もなく、しあわせになれると、仰有るで……それなのに、こんな簡単なことが、実行できんから、人間は困つたものやなあ……それから、上に立つ人が下にある人を、ままだにしないで、神さんとして大事にすれば、世の中は平和におさまると、仰有るで……神さんはなあ、上に立つ人がままだにしていると、おこつていなさるのやで。下にある人が不憫やと、嘆いていなさるで——」

「それなら、この戦争をどう考えているのですか、どうしようとしているのですか、その神に心があるなら——」

「神さんには日本人も支那人もアメリカ人もないで……世界一列兄弟で、白い人も黒い人も黄色い人も、みな同じ子

供やで。長い間、よその国にままだにされて、苦勞した國の人々を、今度こそ神さんは助けると、言つていなさるで……心配せんでも、戦争はいまにおわります。だが、その前に、戦争している國々の人間は、心がやさしくなるために、さんざん苦勞しなければならんで……空襲にあつて家を焼かれたり、身内に死なれたり、餓えたりして……その涙で気が折れて、他人にも他國にも頭を下げるようになるで。そしたら、戦争はおわります」

「それはいつですか——」

咎めるような口調で次郎は激しく言った。

「なあ弟はん、神さんは辛抱して待つたんだつせ……人間の心がやさしくなるのを、長い間……でもなあ、神さんはもう人間には頼まん、神さんの方ですと、言つてなさる。それで、用意していなさるから、戦争はおわるで……だが、人間が想像できないような、怖ろしい、こわいことが起きて、戦争をやめなければならぬようにすると、神さんは仰有つてゐるで。そしたら、世界はころっと、夜が明けたように變るで。上も下もなく、男も女もなく、人間は同じように神さんの子供——神さんのようになるのやで。世界中、あちらでもこちらでも、おさえられていた國の人間が、一人前になつて、喜びの声をあげるようになるで。そしたら、新しい時代になつた、新しい世界になつたと、言われ

るようになるで。神さんがそうすると、仰有るから、きつとそうなるで。そしたら、平和がつづいて、大きな戦争は、もうこわくてできんようになるからなあ……」

次郎は荒唐無稽な話になったので、興味を失ったが、一郎はかしこまってますます熱心に耳を傾けていた。

「なあ弟はん、その時になったら、親さんの役目はおわるけど、あんたは、よく気をつけて見張っていなはれや。日本には、なあ、やれ神さんだ、教祖だと言って、贋の教祖や贋の神さんが、ぎょうさん現われて、世の中がわやになるで……だけれど、これから神さんも仏さんも、もう世に現われんで……あれはキリスト教や、あれは仏教や、あれは天理教やと言って、区別しあっていては、世の中はおさまらんで……なあ、世界中の人が同じ神さんにたよらなければならん時になるのやで——」

「同じ神にたよるといふのは、天皇に帰一するということですか」と、一郎が問いかけた。

「天皇は神ではありゃせん、人間やがなあ。ただ、日本人の自家のようなものやから、あがめるのやで……世界中の人がたよる神さんは、この天と地にみちた力——天の神さんやけれど、この神さんにたよるからには、めいめいその神さんの子供やから、おたがいに相手を神として、たてあゝて行かんと、あかん。めいめい自分が神やと思って、や

さしい心になるのやなあ。そしたら、天の神さんを願わんとも、人間はなんでもできます……なあ、弟はん、わたしはそのことを知らせるために、心をすなおにたてかえるように、四十年も説いて来たけれど、みんな、病気がなおった、金が儲かった、ありがたいというだけで、ほんとうに神さんの思いをわかってくれる人は少なくてなあ……それが神さんは残念で、もう待てんと仰有るで——」

その時、お伴して来た男が、赤羽から迎えの自動車が出来たと、老婆へ伝えた。

「赤羽へ行くのかや……なあ浦西さん、赤羽へは行けんなあ、七時半の汽車で帰らなければあかんで——」

「今夜は赤羽の関さんに行つて、二晩泊めてもらつて、川口に一晚泊してもらふことになっております。変更なさるんですか。帰ると言つても、親さん、切符はなし、七時半の汽車なんか、ありませんよ」

「関さんがもう切符をとつてあるで……電話をして、東京駅へ持つて来るように言いなはれ。七時半の汽車に乗るように、神さんが言うのやから、その時刻に東京駅を出る汽車があるで……」

そう言いながら立つて、奥さん、奥さんと呼んで食堂の方へ行つた。

「さあ、みんなで、さっきのご馳走をよばれましょうなあ